

王甫昌著

『當代台灣社會的族群想像』

台北 群學出版有限公司 2003年 x+195pp.

かき ざわ み ち  
柿 澤 未 知

はじめに

2004年3月20日、台湾で第3回目となる総統直接選挙が行われた。与野党両陣営ともエスニック対立を激化させないと公言していたにもかかわらず、同選挙の前後に現出した数々の現象や実際の投票行動は、台湾政治が依然としてエスニックな対立と相互不信を超克できていない現実を示すものと受け止められた。同選挙の過程で生じたエスニックな亀裂を癒すため、総統再選を果たした陳水扁は同年5月20日の総統就任演説においてエスニック集団間の融和を訴え、9月には与党・民進党が「エスニックな多元国家の一体性に関する決議文」(族群多元国家一体決議文)を採択するなど、エスニック関係の融和に向けた積極姿勢を示した。

民進党は、1993年に発表した「エスニシティと文化政策白書」の中で、既に文化多元主義的立場に基づくエスニック集団の平等と相互尊重、融和を訴えていた。支持者のエスニックな分布に関して民進党の対極に位置すると見なされる新党も1995年に発表した政策白書の中で、エスニック集団や省籍間の争いを煽る行為に反対し、「エスニック共和と多元的文化的平等の精神を実現すべき」と指摘するなど、民進党とほぼ同様の主張を掲げていた。その後10年以上を経た今日、エスニック問題が今も台湾の政治社会の大きな焦点となっているという現実、台湾政治におけるエスニック問題の重要性と問題の根深さを物語っている。エスニック問題と、これと交差するアイデンティティの問題は、戦後台湾の政治変

動における主要な原動力のひとつであり続けており、「エスニックな融和」の理想や理念は現実政治の前ではあたかも無力であるかのように感じられる。

本書は、台湾政治・社会変動のきわめて本質的構成要素であるところのエスニック問題について、これを理解するための基本的視座を提供するものである。

I 本書の構成

本書の構成は以下のとおりである。

第1篇 エスニック集団とは何か?

第1章 前言

第2章 エスニック集団、エスニック・アイデンティティとは何か?

第2篇 台湾社会のエスニックな想像——台湾4大エスニック集団——

第3章 4大エスニック集団の内部相違性

第4章 台湾の「エスニックな想像」の起源——本省人・外省人間のエスニック意識の形成——

第5章 原住民と漢民族の区分

第6章 本省人の中の「閩南」と「客家」の区分

第7章 「外省人」というエスニック・カテゴリーの想像の生起

第8章 対抗的エスニック意識から4大エスニック集団の言説へ

第9章 結語

第1篇は全体の導入部にあたり、現代台湾のエスニック問題を見る場合の基本的視座を提供するものである。特に第2章では、何ゆえエスニシティという集合的アイデンティティが形成され、それが人々の社会的、政治的行動様式の決定に際して重要性を有するののかという根本的問いについて、適宜台湾の事例を引用しながら説明がなされている。本書のエッセンスは同章に凝集されているといっても過言ではない。

第2篇では、台湾のエスニック関係の形成とその

性質に関する歴史的考察が行われている。まず、今日の台湾で広く流通する「4大エスニック集団」(4大族群)の分類方法に則りながら、台湾のエスニック関係の全体像が示される(第3章)。そのうえで、その4大エスニック集団の各々について、エスニック意識(エスニック・アイデンティティ)形成の過程とその社会的背景が説明されている(第4章~第7章)。第8章では、台湾のエスニック関係をめぐる今日の状況として、国家・民族意識をめぐるエスニック集団間の認識の相違が、エスニックな融和と共存という理念の具現化を阻んでいる現実が指摘されている。そして、第3章~第8章の議論を踏まえて、エスニシティ概念全般へのフィードバックを行ったのが第9章である。

著者は、本書をエスニシティ問題の入門書として位置付けており、台湾のエスニック関係を理解するうえでの基本的視座と歴史的・実証的考察が、きわめて平易かつ系統的に提示されている。台湾のエスニック関係が、戦後台湾の政治・社会の構造変化にとって、きわめて重要な役割を担ってきたことは内外で広く認知されている。にもかかわらず、複数の著者による論文集や、特定のエスニック集団を扱ったものを除き、系統的かつ包括的に台湾のエスニック関係を説明した概説書はほとんど存在してこなかった。本書は、台湾エスニシティ研究の第一人者と広く認められる王甫昌氏(中央研究院社会学研究所研究員)による初の単著であり、今後、台湾研究者にとっての必読書として様々なかたちで国内外の研究者に引用されていくことが予想される。

## II 本書の論点

本書の主要な論点を整理すると以下のとおりである。

第1の論点は著者が本書を著した動機とも関連する。すなわちエスニック集団に対する人々の帰属意識は、一般に信じられている(想像されている)ような長い歴史を貫いて存在してきた客観的・原初的存在ではないという点である。著者は、エスニック集団への帰属意識が形成されるうえで「起源、祖先、

文化・言語の共通性」に関する歴史的事実は本質でなく、こうした共通性が各人の内面・主観において真実であると「想像」され信じられていることが本質的に重要と強調する。本書の主題が「現代台湾社会のエスニックな想像」とされているのは、著者がこの論点に特に力を置いているためである。著者の立場は、エスニック集団間の血縁的・文化的境界線がかなり古くから本質的差異として明確な輪郭を持ちながら存在してきたとする「原初主義」(primordialism)や「本質主義」(essentialism)に反駁するものと言える。

それでは、かかるエスニック集団への帰属意識が一定の範囲(境界)を有するものとして想像され、人々の間で共有されるようになる契機は何か。これが第2の論点である。著者は、ここで利益の衝突、構造的不平等関係という政治経済要因を分析の重点に据える。著者の理解では、エスニック集団を分け隔てる血縁的・文化的境界線とは、集合的利益の配分をめぐる構造的不平等の是正に向けて被抑圧者を効果的に動員するため、恣意的、選択的、功利的、便宜的に生み出される人工物である。ここでは、文化・血縁の外周をめぐる「歴史解釈」は、政治的・社会的闘争を推進するうえでの有効性を基準に行われ、闘争上の目的に沿わない「史実」は意図的に切り捨てられる。

この論点に関連した重要な指摘として、エスニック集団の「規模」の問題が挙げられる。著者が的確に指摘するとおり、言語・文化・出自の差異を境界線とするならば、台湾の「4大エスニック集団」は、本来、より小さな集団に細分化されうる(特に原住民、外省人)。かかる事実にもかかわらず、「4大集団」へのエスニック帰属意識の収斂が生じるメカニズムとして、著者は民主主義的政治制度の存在を指摘する。民主代議制度下では規模の過小な集団は十分な政治的影響力を行使し得ないため、本来可視的に存在していたはずの歴史的記憶の多様性や文化的差異は、知識分子による新たな集団的アイデンティティの「想像」過程において選択的に忘却ないし隠滅され、より大きな集団へのアイデンティティの収斂が促される。このように、エスニックな境界線は

きわめて人工的かつ可変的なものと捉えられており、著者のエスニック問題への視角は「状況主義」(situationalism)にきわめて近いと言える。

第3の論点はエスニック集団の相対性に関する議論である。著者は、台湾のエスニック意識がそれぞれ一対一の相対関係を基調とし、強い対抗性を帯びて発展してきた経緯を確認したうえで、「4大集団」という並置的な「語られ方」は伝統的な一対一のエスニック対立意識から脱却した文化多元主義的性質を持つものと評価している。「4大集団」という認識枠組みは、本来は次元を異にする3つのエスニックな境界線を単一のプラットフォームに乗せて論じる便宜的分類方法であるとともに、一定の政治性を有する概念でもある。台湾のエスニック関係を語るうえで、かかる便宜性と政治性に無自覚のままに「4大集団」の枠組みに依拠することには慎重であるべきであり、著者の指摘は、「4大集団」論の発展過程とその本質を確認するうえでの確かな指摘と言える。

第4の論点はエスニック意識と民主化運動の関係性についてである。著者は、本省人(閩南人)の国民党政権に対する反体制運動は、本省人の外省人に対するエスニック運動を意図・目標としたものではなく、あくまで民主化推進上の“手段”であり“副産物”であったと指摘している。エスニックなルサンチマンが民主化要求の基礎・原動力であったのか、あるいは民主化運動の手段としてエスニックな対立軸が利用されたのかという、戦後台湾民主化論における「卵と鶏」論争において著者は後者の立場を採っている。

第5の論点は民族・国家の範疇の「想像」とエスニシティの関係である。今日の台湾では、既に政治的民主化を通じて制度的不平等は改善・解消されており、しかも、「4大集団」間の対等性や相互尊重が「政治的正しさ」として広く認知されている。にもかかわらず、特に選挙や政治闘争の場においては、しばしばエスニックな対立意識が正体を現し、台湾政局の行方を左右している。こうした現状について、著者は、中国ナショナリズムを集団内で共有・継承してきた外省人と、民主化運動の過程で台湾ナショナリズムを発展させてきた本省人の間には、兩岸統

一と台湾独立を両極とする民族・国家意識の分岐が生じており、かかる民族・国家意識(統一/独立志向)の不一致と背反性こそが、両集団間の相互不信を再生産している本質的問題であると指摘している。この点は台湾政治と兩岸関係の行方を考えるうえできわめて重要な指摘であろう。

### III 問題提起

以上、本書の主要な論点を踏まえたうえで評者なりの問題提起を行いたい。

第1は、著者がエスニック意識の発展をめぐる時期区分として、(1)2.28事件前、(2)2.28事件から1970年代中葉、(3)70年代中葉から今日、という3つの時期区分を提示している点である。著者は2.28事件前後を区別する要素として、同事件発生まで、本省人は外省人に対してエスニックな境界線を基調とした普遍的敵意を有していなかったとする。しかし、何義麟、李筱峰、呉密察らの研究は、当時の本省人エリートの中において、外省人は民族カテゴリー(ナショナルな想像)を共有する同胞ではあっても異なる文化・価値観を有する集団として認識(エスニックな想像)されていたことを示している[何2003;李1991;呉1993]。2.28事件は、外省人を排除した台湾独立を目指すナショナリズム運動ではなく、地方自治の健全化を求める政治改革要求という性格が強かったが、台湾本省人の外省人あるいは「中国」に対する「異物感」を抜きにしては、事件の過程で発露した本省人の外省人に対する敵意を説明することはできないであろう。

著者はまた、1970年代以降に「台湾大の国境線」の内部においては本省人も外省人も平等な同胞であるという主張(平等な公民意識)が、外省人を排斥する旧来の敵対意識に代わる概念として本省人側から提起され受容されていったことを新たなエスニック意識の芽生えとして強調している。しかし、かかる概念・主張を1970年代の新しい潮流として捉えた場合、50年代末からの『自由中国』雑誌と中国民主党結党運動過程における外省人知識人と本省人政治家の結合や、彭明敏らが「台湾人民自救宣言」(64年)

で示した「省籍を分けずに団結・協力して新国家を建設」の目標設定はいかに位置付けられるのか。1970年代以降の民主化・本土化運動の意義を強調すると同時に、それ以前との連続性についてもより十全な指摘がなされるべきものと思料される。

時代区分の問題に関してより重要なのは、本書が1980年代末以降の民主化という巨大な政治変動を時代区分上の分節点として適切に指摘していない点である。この点、台湾のエスニック関係が民主化を起点として性質を大きく変えてきたとの呉乃徳の指摘はきわめて的確である〔呉 2002〕。呉が指摘するように、台湾のエスニック対立は民主化以前の政治権力の配分をめぐる衝突から、民主化を経た今日の「第2段階」には象徴的次元における「アイデンティティの衝突」に変質している。今日表出している本省人／外省人間の相互不信と対立は政治的理念や志向性といった抽象的・観念的レベルにおける対立に変質しており、民主化前のエスニック関係との間にかなり明確な線引きが必要であろう。

第2の問題提起は台湾と外部との関係性についてである。本書は台湾内部のエスニック関係の輪郭を示すことに主眼が置かれているためか、台湾外部との関係性への言及は少ない。しかし、著者も指摘するとおり、台湾のエスニック関係、特に本省人と外省人の関係は台湾／中国ナショナリズムの相克を抜きにして論じることにはできない。

呉淑人が指摘するように、台湾アイデンティティの形成を考えるうえで台湾が歴史的に直面してきた「周辺性」(中心対周辺)という理解の枠組みが重要であろう〔呉 2004〕。国民党政権は台北に居を構えながらも、その正統性の根拠を中国大陸に置いていたのであり、その文化的・政治的中心性は「台湾」ではなく「中国」にあった。この点こそ、国民党政権に対抗する政治的訴求として民主化要求と台湾ナショナリズムが結節した大きな要因であった。台湾ナショナリズムは「民主」という価値と結合しながら、国民党政権への対抗という必要性から「想像」されてきたが、民主化の達成を経て台湾ナショナリズムの矛先は、かつての国民党政権から中華人民共和國政権へと移った。ここに至って、台湾ナシ

オリズムをめぐる「中心—周辺」関係は、国民党政権(台北)と台湾土着社会という台湾内部関係から、中国大陸(北京)と台湾大の「想像の共同体」という外部関係に転位したのである。そして、かかる外部関係つまり台湾側から見た中国イメージが投射されることで、外省人やいわゆる「統一派」に対する一部本省人の不信感と排斥感情が再生産されているものと考えられる。かかる中国大陸と台湾との関係を抜きにしては、今日の台湾における台湾ナショナリズムの本質を的確に説明することは困難であろう。

さらに付言するならば、台湾ナショナリズムが主流の言説(discourse)を支配する今日、中国ナショナリズムを内面化させてきた外省人は台湾内部関係と中国大陸との関係の両面において「二重の周辺化」というアイデンティティの危機に直面している。外省人のアイデンティティについては、近年、台湾で優れた研究成果が出されてきているものの、いまだ系統的な分析は不十分であり、今後さらなる研究の深化が求められる領域と言えよう。

第3の問題は、本書が、台湾のエスニック関係の歴史的、政治学的分析に重点を置いている一方、一般的な社会学の視点については十分に示していないことである。社会学の視座としては、政治的社会化とエスニシティの関係性、すなわち家庭や教育における政治的社会化や集合的記憶の集積と伝播のメカニズムが個人のエスニック意識とアイデンティティの形成に及ぼす影響が指摘されよう。教育を通じた政治的社会化の影響については、早くは1970年代の米社会学者による先駆的研究に始まり〔Wilson 1970; Appleton 1976〕、多くの興味深い研究成果が発表されており、これら先行研究の成果を整理しておくことは台湾エスニック関係の概説書としての本書の価値をより十全なものとしたに違いない。

また、エスニシティと社会的階層化の関連性もエスニシティ研究の重要な柱のひとつであり、本書の基本的視座を形成しているエスニックな不平等関係を論じるうえで不可欠の要素であるはずだが、本書では必ずしも明確かつ深い言及はなされていない。かかる社会階層のエスニックな不均衡を実証的データを用いて指摘することは、戦後台湾のエスニック

関係の素地となった不平等性をより明確に浮かび上がらせるとともに、政治的対立の一方で社会・経済面での深刻な対立・隔絶はないという台湾エスニック関係（特に本省人／外省人関係）の特殊性を考えるうえでの重要な視座を提供することができたのではないかと思う。さらに、政治的社会化と社会階層化に関連する問題として、世代（年齢層）とエスニック意識の関連性についてより踏み込んだ分析と言及があれば、台湾のエスニック関係をめぐる過去、現在、未来の橋渡しが効果的になされえたのではないかと考える。

台湾のエスニシティ研究は1980年代末から本格的に開始されたばかりであり、台湾研究の分野としては比較的新しい領域であるが、問題の重要性ゆえ、台湾ではきわめて精力的に研究が進められている。概説書としての限界ゆえ、本書においては詳しく触れられなかった問題も少なくないが、これらについても台湾では優れた実証研究の成果が多く発表され、絶えず新たな視座や実証データが提示されている。台湾政治・社会情勢に関心を持つ読者・研究者は、現在進行形で発展する台湾の研究動向を常に把握しておく鋭敏さが求められるであろう。

文献リスト

<日本語文献>

- 何義麟 2003. 『二・二八事件——「台湾人」形成のエスノ・ポリティクス——』東京大学出版会。  
 呉淑人 2004. 「インタビュー 台湾アイデンティティ、何処から何処へ」『アジア研ワールド・トレンド』No.108（9月）：12-15。  
 呉密察 1993. 「台湾人の夢と二・二八事件——台湾の脱植民地化——」『岩波講座 近代日本と植民地 8』岩波書店。

<中国語文献>

- 李筱峰 1991. 「二二八事件前文化衝突」『思與言』第29卷第4期（12月）。  
 吳乃德 2002. 「認同衝突和政治信任——現段階台湾族群政治的核心難題——」『台湾社会学』第4期（12月）。

<英語文献>

- Appleton, Sheldon 1976. "The Social and Political Impact of Education in Taiwan." *Asian Survey* 16 (8) (August).  
 Wilson, Richard W. 1970. *Learning to Be Chinese: The Political Socialization of Children in Taiwan*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

(外務省職員)